

二国間交流事業 共同研究報告書

平成 21 年 4 月 9 日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

共同研究代表者所属・部局 岡山大学・大学院社会文化科学研究科

職・氏名 ^(ふりがな) 准教授・出村 ^{でむら} ^{かずひこ} 和彦

1. 事業名 相手国（オーストラリア）との共同研究 振興会対応機関（ ARC ）
2. 研究課題名 転換期における「貧困」に対する取り組みの共同研究—初期キリスト教をモデルにして

3. 全採用期間

平成 19 年 4 月 1 日 ～ 平成 21 年 3 月 31 日 （ 2 年 ヶ月）

4. 研究経費総額

(1) 本事業により交付された研究経費総額 4540 千円

初年度経費 2490 千円、 2 年度経費 2050 千円、 3 年度経費 千円

(2) 本事業による経費以外の国内研究経費総額 千円

5. 研究組織

(1) 日本側参加者

氏名 <small>(ふりがな)</small>	所属・職名	研究協力テーマ
出村 和彦 <small>でむら かずひこ</small>	岡山大学社会文化科学研究科・准教授	研究総括・アウグスティヌス
土橋 茂樹 <small>つちはし しげき</small>	中央大学文学部・教授	バシレイオス・カッパドキア教父
出村みや子 <small>でむら こ</small>	東北学院大学文学部・准教授	アレクサンドリアのクレメンス・オリゲネス
戸田 聡 <small>とだ さとし</small>	一橋大学大学教育研究開発センター・非常勤講師	エジプト修道制・パホーム
鈴木 順 (H19年度) <small>すずき じゅん</small>	明治学院大学・非常勤講師	ポントスのエヴァグリオス
上村直樹 (H20年度) <small>かみむら なおき</small>	東京学芸大学教育学部・非常勤講師	アウグスティヌス

(2) 相手国側研究代表者

所属・職名・氏名 Australian Catholic University, Centre for Early Christian Studies, Director, Professor, Pauline Allen

(3) 相手国参加者（代表者の氏名の前に○印を付すこと）

氏名	所属・職名（国名）	研究協力テーマ
○Pauline ALLEN	Australian Catholic University, Professor (Australia)	Director, Augustine
Geoffrey D. DUNN	Australian Catholic University, ARC Research Fellow (Australia)	Augustine, Early Latin Christianity
Bronwen NEIL	Australian Catholic University, Lecturer (Australia)	Leo I
Wendy MAYER	Australian Catholic University, Research Associate (Australia)	John Chrysostom
Silke SITZLER	Australian Catholic University, ARC Research Fellow (Australia)	John Chrysostom, Hagiography
Edward MORGAN	ACU, ARC Research Fellow (Aus.)	Augustine, Economy in late Roman Empire

6. 研究概要（研究の目的・内容・成果等の概要を簡潔に記載してください。）

研究目的

この二国間交流事業共同研究は、P・アレン教授を研究代表とするオーストラリアリサーチカウンシル(ARC)創発研究プロジェクト *Poverty and Welfare in Late Antiquity* (2006-2008)に共同して、古代末期・後期ローマ帝国という「転換期」において、「貧困」が可視化されてくるキリスト教文化形成の素地のもと、キリスト教思想家や司教が「貧困」という問題にどのように取り組んでいたかを明らかにするものである。その際、彼らの言説のレトリックとリアリティを注意深く分析して、その根底にある当時の彼らの人間理解の社会的・文化的・地域的特色をはっきりさせるとともに、またその根底にある普遍性をえぐり出すことも目指される。

内容

古代のキリスト教司教が、「貧者を愛する者」かつ「貧者を治める者」であったというP・ブラウン(P. Brown, *Poverty and Leadership in the Late Roman Empire*, 2002)のテーゼの検証するオーストラリアチームによる4世紀から6世紀の三人の司教クリュソストモス(シリア)、アウグスティヌス(北アフリカ)、レオ1世(ローマ)の活動をその書簡や説教から明らかにする研究と共同して、日本チームは、4-5世紀のアウグスティヌスを共通としながらも、これに先行する時代(2-4世紀)の、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネス、エジプトの修道制、パホームやエヴァグリオス、カッパドキアのバシレイオスといったキリスト教思想家の「貧困」をめぐる言説と行動を吟味した。その際、「貧しい」他者に関わるあり方と、自ら自発的に「貧しい者」となる志向との二つの方向に着目して研究した。前者では、「貧しい者たち」に関わる、善行 *evergetism* 慈善 *philanthropy* 喜捨・施し *almsgiving* といった言説とその行動を解明し、そこにおいて彼らが「貧者とは誰か」「富者であるとうどういうことか」をいかに理解したかを考察した。後者では、自ら「貧しい」者となるあり方をめぐる、修道制 *monasticism*、禁欲主義 *asceticism*、独身制 *celibacy*、清貧 *voluntary poor* といった言説とその実相を探究しつつ、彼らが「貧者になるとはどういうことなのか」と理解していたかを考察した。いずれの場合も、「貧困」「貧者」を表現する語の用例と、これが用いられるテキストのジャンルや現存資料に制約に十分留意して、きめ細かい考察を遂行するものである。

成果

オーストラリアチームは、総合的なモノグラフ *Pauline Allen, Wendy Mayer and Bronwen Neil (eds.), Preaching Poverty in the Late Roman World: Perceptions and Realities* (Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt)の出版(2009年末か2010年初頭)を準備中である。また、訪日した相手国共同研究者のG・Dunn博士やP・Allen教授の講演はわれわれが既に翻訳して刊行し紹介した。日本チームは、それぞれ個別研究を積み重ね学会等で発表し、論文や著作の形で公表してきた。総括として、2009年3月21日岡山大学において、相手国研究代表者P・Allen教授臨席をまじえて、二国間交流事業共同研究の公開研究報告会を行った。これを基にこれまでの成果をとりまとめた報告集をCD-ROMの形で保存する編集集中である。本共同研究は、「貧困」「貧者」を指す用語の検討(ギリシア語・ラテン語)、レファレンスの枠となるテキスト(聖書・哲学・古典文学)の解釈史、レトリックとリアリティの見極め、社会経済的背景と精神的文化的背景の交錯、古典古代とキリスト教古代の対比と類同、西欧中世との連続と非連続といった多岐にわたる論点を掘り起こすものであり、今後、アウグスティヌス、クレメンス・オリゲネス、バシレイオスといった個々の思想家の「貧困」理解に関するわれわれのモノグラフを出す基礎を築くものとなった。これを通じて豪州・アジア環太平洋での研究から見えてきた、欧米の研究には無い新たな視点を世に問うのが今後の課題となろう。